「ヒロシマの家」計画と建てられた住宅に暮らした人々に関する調査

西村　宏子（にしむら　ひろこ）

シュモーに学ぶ会　代表

シュモーに学ぶ会
　2004年、「シュモーさんの『広島の家』を語り継ぐ会」としてスタート、2014年に「シュモーに学ぶ会」と改称。世界平和を目指して行動し続けたフロイド・シュモーとその仲間たちの足跡をたどり、その功績を次世代に伝える活動に取り組む。2012年、広島平和記念資料館附属展示施設「シュモーハウス」の開館以後、同館から委託を受け展示解説を行っている。
　2019年度から2021年度にかけて広島平和記念資料館資料調査研究会特別会員として本調査を実施。

1．はじめに

1949 年から 1953 年にかけ、アメリカ人のグループが中心となり、国籍・民族・宗教など様々な違いを持った人たちが共働して被爆者のために 15 棟 21 戸の建物の建設を行った。これら一連の建設計画は「ヒロシマの家」と呼ばれ[1]、その責任者であったフロイド・シュモー（Floyd Wilfred Schmoe, 1895〜2001 年）[2] と仲間たち、また建てられた住宅に暮らした人々について、われわれの「シュモーに学ぶ会」ではこれまで資料収集や関係者への聞き取り調査を行い、書籍や講演、「シュモーハウス」[3] などでの展示解説等を通じて、その成果を多くの方々に伝えてきた[4]。

一方、この調査を続ける中で、さらに聞き取りや資料収集が必要な関係者や機関があることが明らかになってきた[5]。本稿では、広島の住宅建設に関する調査を継続して行うほか、同時期に長崎にも建てられた住宅の調査を行い、「ヒロシマの家」計画と、その住宅に住んだ人々に関する全容を主に関係者への聞き取り調査を通じて明らかにしたい。

2．フロイド・シュモーと「ヒロシマの家」計画に至るまで

シュモーは 1895 年 9 月 21 日にアメリカに生まれ、大学で森林学を学んだ[6]。第一次世界大戦が始まると良心的兵役拒否の道を選び、アメリカ・フレンズ奉仕団のヨーロッパ救済活動に参加した。帰国して大学に戻り、卒業後はワシントン州のマウントレーニア国立公園で公園保護官として勤務、1928 年から母校であ

るワシントン大学の教職についた。1941 年、ハワイ・真珠湾が日本軍に攻撃されると、大学の職を辞して日系人支援に乗り出した。

アメリカは 1945 年 8 月 6 日に広島、8 月 9 日に長崎に原子爆弾を投下し、それを知ったシュモーは住まいを失った人々のために家を建てる活動をはじめることになった。

フロイド・シュモー
提供：前川　博

3．動き出した「ヒロシマの家」計画

当時、個人という立場では許されなかった渡日も、占領軍の事業の一環としてならば容易であった。然しそれはシュモーの信念が許さなかった[7]。あくまで個人として日本に行き被爆者のための住宅を建設するという考えを貫こうとしたのである。1948 年夏、シュモーは復興支援団体のララ（LARA）の一団体であるアメリカのヘイファーズ救済委員会が行う活動に参加することでようやく日本上陸を果たした。シュモーは、アメリカから 227 頭の山羊の世話をしながら横浜の港に着いた（彼らは Sea Going Cowboys と呼ばれた）[8]。それは、飢餓に瀕している日本の子どもたちに、ヤギの乳を飲ませようという配慮から出た計画であった。任務を終えたシュモーはすぐさま広島に向かったのである[9]。

その広島は、原爆により、市全域にわたって壊滅的被害を受けた。あらゆるものが不足し医療も立ち遅れ、多くの人々が大切な家族や友人を失い、失意のどん底にあった。

住居の被害については、爆心地から半径 2 キロメートルの木造家屋が全壊・全焼しており、市域全体のわずか 1 割弱の住宅が、かろうじて一部を損壊した状態で残されたに過ぎなかった[10]。そこから、復興住宅などの建設も徐々に進められてはいたが、1950 年の時点でも 16,000 戸の住居が不足しているといわれ、市内の人口は急増を続けたため市域内の住宅難は深刻であった[11]。シュモーは、廃墟となった広島の街を自身の目で見て歩き多くの写真も撮影していた。その中には、瓦礫の中から焼け残った資材をかき集め、トタンで屋根を覆っただけの掘っ立て小屋に暮らす被災者の姿も収められていた。

日本滞在中の 8 月、シュモーは東京でワークキャンプに参加した。それは、

1948 年 7 月　ヤギを連れて来日
所蔵：ジュディ・ルドルフ

1948 年夏　被爆後の広島市内の住宅
提供：シュモー・富子

キリスト友会の「ヤングフレンズ」と呼ばれる若者17名が、普連土学園や第六高女（都立三田高校）の生徒たちと協力して、広尾（東京都港区）の「育児会」で開催したもので、保育・オムツの洗濯・家具のペンキ塗り・布団や衣類を仕立てるなど奉仕活動を行った。シュモーは、暑さもいとわず率先して若者に教えながら、錆が付いて汚れていた赤ちゃんのベッドを真っ白に塗り替えた[12]。

その翌日、シュモーはフレンズセンターで行われたキリスト友会の集会に出席して「ヒロシマの家」計画について説明し、ララの日本代表の一人に任命されたエスタ・ローズら日・米の友会徒（フレンズ）に、その計画を実現させるための相談をした[13]。ローズもクエーカーであり、シュモーと同じく戦中戦後を通して日系人の支援にあたった一人である[14]。前日の奉仕活動で、シュモーと共に汗を流し、この集会にも参加していた日本女子大学の学生であったシュモー・富子（旧姓：山崎）は、当時を振り返りこう証言した。「素晴らしいと思った。広島の被爆者の方々にとって、まず必要なのは住宅だと思い、彼の計画に感激した。私自身、東京大空襲で家を焼かれ、住むところがないという辛さは嫌というほど知っているから」と（「ヒロシマの家」建設メンバーであるシュモー・富子への聞き取り調査より、2019年9月30日）。広尾の「育児会」で行われたワークキャンプに参加した布川謙や吉田勝三郎も「ヒロシマの家」の建設メンバーとなるのであった[15]。

アメリカに帰国後、シュモーは計画を実現させるために奔走した。親戚や普段から交流のあった友人に手紙を書いて、仲間を誘い、資金援助を募った。シュモーはプロジェクトにかける想いを「ヒロシマの家」建設メンバーとなるルース・ジェンキンズに手紙を送りこう伝えている。「ヒロシマは、私たちが犯した重大な犯罪を記憶しておくべき地であり、今回の戦争で最悪の攻撃を受けた街の一つであるからこそ、この地にその家を建てたいのです」[16]と。

翌年の1949年に入ると、日本の有力者や広島市長とも国際郵便によって頻繁に連絡を取り合い、具体的な準備を進めた。また、昭和天皇にも手紙を書き、「ヒロシマの家」への思いを綴り理解を求めている[17]。

ようやく占領軍から日本に入国するための許可書を取り付けることが出来た[18]。寄付金は4300ドルがアメリカだけでなくハワイ、プエルトリコ、メキシコ、カナダ、アラスカ、フランス、中国、日本からも集まった[19]。食料、医療品[20]、ガラス・釘・電気工事のコード・水道のパイプ・大工道具なども準備して[21]船の出発を待った。

4.「ヒロシマの家」建設の始まり

1949年7月17日、シュモーたちを乗せた客船（ジェネラルゴードン号）はサンフランシスコを出港し、ハワイ・ホノルルに寄港したのち7月31日に横浜港に到着した[22]。アメリカから来日したのは、（写真左から）シアトルの日本人バ

1949年7月22日　来日途中にハワイ（ホノルル）に寄港したシュモーたち　提供：北澤純子

プテスト教会の牧師エメリー・アンドリュース、アリゾナ州の小学校教師のルース・ジェンキンズ、黒人女性でサウスカロライナ州にあるハービンソン大学講師のデイジー・ティブズとシュモーの4人。このメンバーは第二次世界大戦中にシュモーと同じく日系人の支援に携わった人たちであった[23]。日本に滞在期間中の保証人となったのはエスタ・ローズである[24]。東京では、参議院議員であり広島県呉市の元助役を務めたこともある、高良とみの自宅を拠点に3日間過ごした。その間、国立国会図書館や議員会館の見学もしている[25]。また、様々な行政上の手続きをこなし、旅券の相談や必要な買い物を済ませ、協力者にも会った。8月3日、学生を中心とした6人の若いボランティアも加わり、合計10人で東京駅から列車に乗った。夜には神戸に到着し、一泊したのち8月4日にようやく広島入りを果たした[26]。

移動手段にはシュモーの人となりや信条が感じとれるエピソードがある。例えば、サンフランシスコから横浜港まで3等の船旅を続けた。東京から広島への列車移動も同じく3等車に乗ったが、当時、外国人は2等車に乗るのが常識だったため、車掌は2等車への移動を促したのだ。しかし、シュモーはきっぱりと断った[27]。多くの人の心のこもった浄財を無駄にすることなく、アメリカ人だからという優遇にも目を向けることはなかった。広島駅では濵井信三・広島市長、楠瀬常猪・広島県知事、市の関係者に加え多くの人が出迎えた。新聞記者からの取材も受け、翌日の紙面には、「平和運動は言うことではない、行うことである」[28]というシュモーの言葉も紹介された。

シュモーとその仲間たちは、かねてより交流のあった谷本清が牧師を務める広島流川教会を宿泊場所とした[29]。

ただ、シュモーも予期していたとはいえ、広島市サイドの様々な事情から、すぐには「ヒロシマの家」建設は始められなかった。しかし、彼らはただ待つのではなく、広島記念病院で奉仕活動を始めた。薬局・調理室・看護婦の手伝い・床掃除などあらゆる仕事をした[30]。

2週間後、ようやく広島市との協議がまとまり、住宅用地も決定して、「ヒロシマの家」建設がスタートした[31]。

シュモーたちは、皆実町の電信隊跡に市営住宅と同型の家屋2棟4戸を建てることになった[32]。アメリカ・東京・広島から集った学生や社会人らがその作業に当たるのだが、家づくりに関しては全員が素人であるため、1日1ドルで大工の棟梁を一人雇い指導を受けた[33]。

1949年8月　神戸　東京の若者と合流
提供：北澤純子

1949年8月　広島記念病院で働くメンバー
提供：北澤純子

1949 年　瓦を手から手にリレーしていく　提供：ウイルフレッド・P・シュモー　所蔵：広島平和記念資料館

共に手を携えて　提供：ウイルフレッド・P・シュモー　所蔵：広島平和記念資料館

1949 年 8 月　宮島観光　提供：北澤純子

日曜日を除く毎日、炎天下の中、現場まで重い材木を積んだ荷車を引いて歩いた。運び込む資材を守ったボランティアもいた。津田豊彦である。津田は神戸医科大学を卒業して、出身地にある広島鉄道病院でインターン勤務をしていた。自由に使える時間は殆どなかったが、トラックや荷車に積んだ材木や資材などが盗まれないように、夜は車の運転席で睡眠を取った（「ヒロシマの家」建設メンバーである津田豊彦への聞き取り調査より、2009 年 4 月 12 日）。津田と中学校の同級生だった渡辺寛は広島の大学に通っており、使える時間はフルに現場で働き「壁土作りや屋根の上に瓦を乗せる作業は特に重労働だった。シュモーさんは、信念を持ったいわゆる筋金入りの人だった。メンバーの人たちは爽やかで黙々と働いていた」と証言する（「ヒロシマの家」建設メンバーである渡辺寛への聞き取り調査より、2009 年 8 月 24 日）。

しかし、彼らをはじめ関わった人々はみな楽しそうに思い出を語り、当時のアルバムには笑顔の写真ばかりが並ぶ。不慣れな作業に取り組みながらも、手を携え、助け合って一本の木を切る。そこには、お互いを思いやる優しいまなざしや、共に汗を流して働く充実感が見て取れる。また、作業以外にも様々なシーンが収められていた。休日には川遊びを楽しみ、宮島見物にも出かけている。宿舎では当番を決めて家事を行った[34]。

ある日、近所の小学校から先生に連れられて 6 年生の子どもたちが建設現場を訪ねてきた。シュモーたちにインタビューしようと、自分たちで質問を書き出してきていたことに驚かされたという。更に数日後、その中の 3 人の少年は放課後にやってきて、庭に入れる土砂を運び、敷地に小庭園を造る手伝いをするようになった。続いて、彼らの学校の先生や母親も参加して夕方まで一緒に働いた[35]。

一つの目的のために、様々な人が仲間となって力を合わせたことで「ヒロシマの家」は完成した。シュモーは「こんな嬉しいことは私の生涯で初めてです」と、言っている[36]。庭にはシュモーの願いを込めた石灯籠が置かれ、「祈平和」の文字が刻まれた。

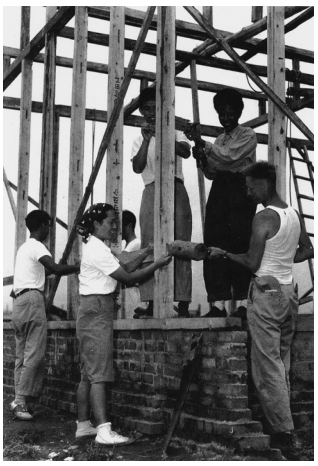
10 月 1 日、広島市への献呈式が執り行われた。式の招待状には住宅が「皆実町シュモー住宅」と名付けられていた。それを発見したシュモーは、当日の寄贈演説の中で「平和住宅」と変更されるべきだと言った[37]。自分は原爆投下の罪を償うためにやってきたのであり、寄付をしてくれた人や一緒に建設にあたった仲間に対しても公正でないと考えたからだ。その演説では「ヒロシマの家」建設についての確固たる理念を述べた。「住宅は私たちの感情や言葉に肉付けしたものでありました。私たちは愛と理解の心をもって暮らし、働いて参りました。このように世界の諸国民は愛と平和と理解の心を持って共に暮らし、かつ共に働くことを学ばなくてはなりません。私たちがやる仕事は、私たちの心の愛を目に見える『愛の表現』とすることです」[38] と。完成した住宅の家賃は月額 700 円で、3,800 もの家族が入居を希望し、広島市が抽選で 4 家族を決定した[39]。

1949 年 10 月 1 日　皆実町　石灯籠を見つめるシュモーと当時の濵井市長　提供：シュモー・富子

5.「ヒロシマの家」建設と新たな広がり

プロジェクト 2 年目の 1950 年は、一番多くの住宅が建設された。世界各地に住む約 500 名の人々から 1 万ドル以上の寄付金が集まることとなり[40]、この中には、シュモーたちが 3 等船客として日本に来る途中で彼らの計画に共感した日系人他、フィリピン人や中国人たちから寄せられた浄財も含まれている[41]。この年、シュモーと共に来日したのは、シアトルで職業学校教師をしている黒人のマリタ・ジョンソン[42] と中国系アメリカ人のボブ・リーである（「ヒロシマの家」建設メンバーである三宅幹夫への聞き取り調査より、2009 年 10 月 4 日）。前年同様に、東京と広島の若者も参加して、江波東に小さいながらも洋風な要素も取り入れた「モデルハウス」を完成させた（同聞き取り調査より）。

1950 年 江波東に建てられた「モデルハウス」 提供：シュモー・富子



1950 年　江波東　提供：三宅幹夫

1950 年　江波二本松での住宅建設
提供：シュモー・富子

この建物は、広島だけでなく日本全国のメディアにも注目されるようになり、住宅雑誌には前年度に建設した皆実町の住宅2棟4軒と共に、「ヒロシマの国際建築」と題し、広島県建設課長の諫早信夫により「シュモー博士の『愛の家』」として掲載された[43]。そこでは、日本の一般的な支援と異なり、大きな組織でなく個人を主体として行っていることに着目している。また、シャツ一枚になって自ら道具を使い、地元の人と協力して熱心に作業に取り組む姿が、市民の間に尊敬や親愛の情をもたらしたと伝えている。

この年は、モデルハウス建設に続いて江波二本松で 7 戸の家づくりが行われるが、シュモーは、「何か単に家を建てる以上のことをやってみる気になった[44]」というのである。そこで、一般の市営住宅より家賃を低くするため政府から直接土地を購入して、被爆者はもとより両親や夫を亡くした家族、朝鮮半島にルーツを持つ家族など、社会的に弱い立場にある人たちに入居の機会を作ろうと市に候補者の推薦だけを依頼した[45]。

プロジェクト 3 年目となる 1951 年は、来日できないシュモーに代わって 2 年ぶりに来日したエメリー・アンドリュースを中心に家づくりは行われた[46]。その他、アメリカからは大学を卒業したばかりのジーン・ウォーキンショー（旧姓：ストロング）と、シアトルの都市計画委員会のメンバーであるビンセント・オドソン（「ヒロシマの家」建設メンバーである三宅幹夫への聞き取り調査より、2009 年 10 月 4 日）、流暢な広島弁を披露して周りを和ませた日系人牧師のジョジョ・サカキバラが一緒だった（「ヒロシマの家」建設メンバーである北川正博への聞き取り調査より、2017 年 10 月 9 日）。

ウォーキンショーは、平和の理想を本で学ぶだけではなく、現実の姿として実感したいと参加を決めた。オドソンは、シュモーが広島で撮った写真のスライドを見て感激し、それから毎週休日になると募金活動に励み、ようやく来日を果たした[47]。

東京からは最年少（16 歳）の布川謙が参加した。布川によると、「共同生活を送っていた宿舎で、毎夜、活発なディスカッションを交わした。『何故、広島に原爆は投下されたか』が話題になるなど、とても有意義な時間だった。戦争や原爆について思い出したくない時代に、そんな議論は珍しかった。この活動で得た経験はその後の人生にも影響を与えた。また、ボランティア仲間だけでなく『ヒロシマの家』の住人とも長く交流をしていた。」という（「ヒロシマの家」建設メンバーである布川謙への聞き取り調査より、2019 年 11 月 12 日）。

1949 年より毎夏奉仕を続ける東京在住の富子は、「ちっとも大変ではなかった。当時は若かったし、仲間との労働、和気あいあいとした生活、何気ない会話、全て楽しかった。」と、当時を振り返った（「ヒロシマの家」建設メンバーであるシュモー・富子への聞き取り調査より、2019 年 10 月 1 日）。

東京出身の北川正博からは広島だけでなく長崎で行った活動について初めて話

を聞くことが出来た。「当時、広島で1週間、長崎で2か月、奉仕活動をした。1944年に父親の転勤で広島に移り住み、中学2年生の時に被爆した。翌年からは長崎で暮らし、1948年になって東京に戻った。が、原爆で多くの同級生が建物疎開の作業中に亡くなったことから、自分はずっと生き残り組の原罪のようなものを感じていた。大学生になって、東京で戦災孤児の支援活動を行った時にシュモーさんの計画を知った。生き残った者の務めと思い参加を決めた。6年ぶりに降り立った広島の街は、多くの人が行き交い、市電が走っていたことにびっくりした。先に広島入りをしていたウォーキンショーさんが広島駅で迎えてくれた。金髪女性のショートパンツ姿が眩しくて、この時に『あー、戦争は終わった』と、思った」と、自身の体験記を綴った冊子を手に語ってくれた（前掲の北川正博への聞き取り調査より）。

1951年　江波二本松　ジーン・ウォーキンショー（左）と北川正博（右）　提供：ジーン・ウォーキンショー　所蔵：広島平和記念資料館

1951年　佐竹利子の家族とともに　提供：三宅幹夫

また、広島出身で学習院大学の学生だった佐竹利子も参加していた。建設現場で仲間とともに車座になってスイカを食べ、宮島へ海水浴にも行っている。それについて本稿では紙幅の関係で掲載していないがジーン・ウォーキンショー所蔵写真よりうかがえる。佐竹は「ボランティア活動を通じて、初めてアメリカ人大学生等と交友を結び、自由平等を原則とする人間の生き方を学び、留学の志を得た[48]」と言っている。佐竹は仲間たちを西条（東広島市）にある実家に招待して家族揃って温かくもてなしている。

この年は、住宅だけでなく、コミュニティハウス（集会所）を建てて、会議室や共同風呂、作業室と図書室も設けるなど[49]、住人だけでなく周辺に暮らす地域の人たちとも触れ合い、交わることができるようにした。映画の上映会やクリスマス会には、周辺の子どもたちや母親たちが入りきれないほど集まって楽しく過ごし、来年もぜひやってほしいと熱望した[50]。

コミュニティハウスについては、米国人、アリス・ブライアントの存在を欠かすことはできない。ブライアントは、フィリピンのネグロス島で農園経営をしていたが、アジア太平洋戦争中に日本軍によって2年半にわたりマニラの捕虜収容施設に収容された。戦後その間の補償金として2,018ドルをアメリカ政府から受け取った。しかし、アメリカによる原爆投下に心を痛めていたブライアントは、その全額をコミュニティハウス建設のために寄付し、原爆投下に対するシアトル市民の謝罪の署名を携えて広島にやって来た。ブライアントの目的は原爆により街を破壊し多くの人を殺戮したことへの許しを求め、日本人によって自分が抑留

されたことへの許しを与えるものだった[51]。

献堂式では、日本人と朝鮮人とが良き隣人となることを希望し、そのためにコミュニティハウスを役立ててほしいと語った[52]。

1952 年　コミュニティハウス（右）　撮影：フロイド・シュモー　提供：シュモー・富子

プロジェクト 4 年目の 1952 年はアメリカからシュモーとディック・平林が来日した（前掲のシュモー・富子への聞き取り調査より）。日本の若者たちと、前年に続き一帯を「Eba Village」と呼び江波二本松に 2 軒長屋 1 棟と牛田東に 2 階建てアパートを建てた[53]。

1953 年にはその横に「ゲストハウス」を完成させたのである[54]。

「ヒロシマの家」の活動は長崎にも広げ、住宅 8 戸[55] と集会所を建てた[56]。

シュモーは一連のプロジェクトの終了を発表し、1953 年から 1956 年にかけて朝鮮戦争で被害が大きかった地域の復興に奉仕した。1957 年には、第二次中東戦争により難民となった人々を救援するためエジプトへ赴いた[57]。その後、1985 年にはシアトルの姉妹都市ウズベキスタンのタシケントに平和公園を作っている[58]。1995 年、94 歳を超えたシュモーは「ノーモア・ヒロシマ」の願いを何かの形で未来に伝えたいとシアトル市に働きかけ「シアトル・ピース・パーク」と

牛田東　ゲストハウス（左）とアパート　（右）
提供：シュモー・富子

牛田東　建築中の様子　提供：ミキオ・トガシ

「ヒロシマの家」建設一覧表

建設年度	広　島				長　崎		
	建設場所	棟数	戸数	用途	建設場所	戸数	用途
1949 年	皆実町一丁目	2	4	住宅			
1950 年	江波東一丁目	1	1	モデルハウス			
	江波二本松一丁目	7	7	住宅			
1951 年	江波二本松一丁目	1	1	住宅	橋口町	5	住宅
	江波二本松一丁目	1	1	集会所	橋口町	1	集会所
1952 年	江波二本松一丁目	1	2	住宅	橋口町	1	住宅
	牛田東二丁目	1	4	住宅			
1953 年	牛田東二丁目	1	1	ゲストハウス	橋口町	1	住宅
1960 年					橋口町	1	住宅
計		15	21			9	

名付けた公園を完成させた[59]。世界平和の象徴として、右手に折り鶴を掲げるサダコ像を据え、市民に平和への行動を呼びかけたのである[60]。

「ヒロシマの家」の活動に参加した若者たちは、留学を志した人や、世界規模の奉仕に取り組んだ人も少なくない。若者の琴線を強く響かせる活動であった。

江波ビレッジの住人となった内山豊子は、中学生の時の日記に「シュモーのように人の役に立ちたい」と記し、結婚するまで暮らした家を「故郷であり青春時代の全て」と言った[61]。

6.「ヒロシマの家」に込めた平和への思い

シュモーが目指したのは、単に被爆者のために家を建てることだけではなかった。平和の構築という、重要な目的があった。そのため「ヒロシマの家」の計画段階から、メンバーの参加についてある考えを持っていた。1949年初め、シュモーは文通相手である東京に住む18歳の少年に手紙を書いて、人種も国籍も宗教も違う人々が集まって広島で家作りをしたいと伝えている[62]。

実際、来日したメンバーは白人、黒人、中国系アメリカ人、日系二世、宗教もいろいろで様々な違いを持つ人たちの集まりであった。

1949年に参加した黒人のデイジー・ティブズと白人のルース・ジェンキンスはとても仲が良かったことを、流川教会の谷本牧師の長女である近藤紘子は記憶している[63]。そのことは、多くの写真からも見て取れる。しかし、ティブズが生まれたアメリカ南部では、黒人を隔離する政策が続いていた時代で、公民権法が成立する、15年も前のことである。次の北澤純子提供写真は、宿舎の畳の上でくつろぐ様子を捉えたものだ。その裏面にはシュモーの筆跡で「こんな光景みたことない。でもやってみようよ」と書かれている。

ティブズが「ヒロシマの家」の活動に参加したときのことを、長女のデブラは聞いている。デブラによると「広島で家づくりをしたことは、人生の中でハイライトの一つ。多くの人と出会えたのは素晴らしいことだった。そして自分は、まるで女優のようだった」と、語っていたという。自分に向けられたまなざしが温かなものであったことを肌で感じていたのだろう。現にティブズは「広島の人は優しかった」といつも話していたそうだ。(「ヒロシマの家」建設メンバーであるデイジー・ティブズの長女デブラ・ドーソンへの聞き取り調査より、2015年4月10日)。

1949年　宿舎でくつろぐティブズとジェンキンス
提供：北澤純子

「ヒロシマの家」建設に集まったメンバーたちが和気あいあいと家作りに励む様子は、関わった人は勿論、遠巻きに見ていた広島の人たちにも伝わり次々と仲間が増えていったのだ。シュモーは、「世界の全人類の協力によって平和運動は進展するものである。…私たち一行の目的は単に家を建てるだけでなく、ともに汗を流して融和を図ることにあり、この意

1951 年　建設現場にスローガンを掲げて
提供：ジーン・ウォーキンショー
所蔵：広島平和記念資料館

1951 年　江波二本松　板切れに書かれたスローガン
提供：シュモー富子

義を全うできた」[64] と語っている。

まさに多様な人たちに支えられてこのプロジェクトは成し遂げられたのである。

1951 年、建設現場には、「ヒロシマの家」に込めたスローガンを掲げていた。

「ヒロシマの家」
家を建てることによって　お互いを理解し合い　平和が訪れますように

違いを違いと認め、尊重し合い、助け合い、労わり合い、同じ目標に向かって家作りを行う。この過程にこそ平和への道筋が生まれると信じ家作りを行ったのである。

2019 年 9 月 29 日、アメリカのシアトルでウォーキンショーから貴重な写真を見せてもらった。シュモーが来日できなかった 1951 年に撮影されたものだ。その写真には、シュモーのいない建設現場で、まだ固まっていない階段のセメントにひとりの若者が “WORK CAMP” の文字を刻もうとしている姿があった。それを、仲間たちがじっと見守っている。同じ場にいただれもが共通の理念をもっていたことだろう。

1951 年 “WORK CAMP” の文字を刻む若者たち　所蔵：ジーン・ウォーキンショー

1984 年 8 月　来日したシュモーを囲んで　提供：山本勇三

「シュモー会館」（2011 年撮影）

現在の「シュモーハウス」
撮影：シュモーに学ぶ会

7.「ヒロシマの家」から「シュモーハウス」へ

これほどにまで思いのこもった「ヒロシマの家」も老朽化や住宅事情の変化も伴い、1996 年までに、1 戸また 1 戸と役割を終えていった[65]。

1983 年、皆実町では跡地に鉄筋コンクリートの市営住宅が完成した。そして、「皆実平和住宅」の名は残され今も受け継がれている。同時に「シュモーの森」と名付けた庭園も作られ、一角にはシュモーが残した「祈平和」と刻んだ灯籠を置いた[66]。

「ヒロシマの家」として現存するのはエバビレッジ（江波二本松）の中にあるコミュニティハウスのみとなっていた。このコミュニティハウスは「シュモー住宅会館」そして「シュモー会館」と名前を変えつつ、より多くの人々が利用する江波二本松の集会所となり、大切に使い続けられていた。ところが、1990 年代後半から始まった広島高速 3 号線の道路整備に伴い、その存続が危ぶまれた。しかし、「シュモー会館」に集ってきた地域の人たち、シュモーたちが建物に込めた思いを受け継ぐ人たちなど、貴重な建物を未来のために遺すべきだという市民の熱意は、広島市にも届き、2004 年に当時の秋葉忠利・広島市長は移転して保存する意向を明らかにした。そして、曳家移転した上で、シュモーたちの活動をはじめ、被爆後の広島に寄せられた海外からの支援を紹介する、広島平和記念資料館附属展示施設、「シュモーハウス」として新しく生まれ変わった。

2012 年 11 月 1 日に開館した小さな資料館であるが、訪れる人は平和への思い、友愛・和解の精神、それを具体化した行動が形になったことを知り、笑顔になってここを後にする。知らない人同士が言葉を交わし、新たな出会いの場になることもある。また、日本各地やアメリカからも家族や知人の足跡を探しに訪れ、時を超え国境を越え、この建物に込められた想いは受け継がれ、新たな希望の架け橋が生まれる場ともなっている。

8．長崎に「シュモー住宅」が出来るまで

長崎に建てられた「ヒロシマの家」について、当会では長く調査を続けていたが、関わった人や当時の住人も不明で建築戸数も資料により異なっていたこともあり、全体像を把握することができずにいた。ところが、広島に「シュモーハウ

ス」が開館してから、シュモーとその仲間たちに関する情報が寄せられ、新たな広がりを見せた。そして、情報提供者や関係者からの証言により、少しずつ明らかになっていったのである。

シュモーは、広島と同じく原子爆弾による惨禍を受けた長崎においても「ヒロシマの家」の活動を目指していた。そのため、1950 年 6 月 18 日から前年に続いて広島で住宅づくりをした後、今度は長崎に赴いたのである。市と直接に交渉を行い、7 月 28 日に協定を交わしたという事実が、このたび長崎市への情報公開請求により公開された資料で明らかとなった[67]。主な内容は以下のとおりである(全文は本稿末尾に掲載した史料紹介を参照)。

「長崎市役所と米國ワシトン(ママ)州シヤートル市北東五五、一三、四三四番地四〇居住のフロイドシュモーとの間の協定書」

・コンクリートの基礎とセメント瓦屋根の木造・漆喰塗のであること。
・建坪は 11.7 坪。居室は畳敷。水道・電気と快適なトイレがある。
・住居は、長崎市が保有し、貧困層の家族に賃貸するため、毎月の家賃は同市が建設した同型住宅の 90%を超えないものとする。
・家賃収入は維持費並びに、追加の住宅資金取得のため特別基金に繰り入れること。
・住宅は貧困家庭、できれば先の戦争で家を失い子どもがいる家庭に貸し出す。
・宗教・人種又は社会的地位は受け入れの条件とならない。
・一軒以上の住宅に対し、1 戸あたり 135,000 円の資金を提供する。

この協定書にある「宗教・人種又は社会的地位は受け入れの条件とならない。」の一文は素案にはなかったものである(文末の史料 3 を参照)。協定を締結する過程で付け加えられたのだ。まさに、このこだわりこそが、シュモーの生涯を通して揺るがぬ信念を表している。

シュモーは 8 月 14 日に、まず 2 戸分 27 万円を長崎市に送金した。その後も、浄財を集めては送金を続けた。新聞紙上では「愛の家」「初めての外貨援助」と紹介された[68]。

市は最初の送金を受け、シュモーの意向も聞いた上で、すぐさま住宅用地の検討を始めた。山王神社の一本足鳥居下周辺も候補となったが、最終的には山里小学校と浦上川に挟まれた約 800 坪の敷地に建設することになった。

山里小学校(中央)と浦上川に挟まれた辺りに「シュモー住宅」が建設された　撮影：米軍　所蔵：長崎原爆資料館

翌 1951 年、6 月 4 日の臨時議会において「シュモー住宅条例」並びに「シュモー住宅基金」が可決し[69]、『長崎市史年表』によると、7 月 2 日、「シュモー住宅条例」が公布施行された。「長崎の災害を悼み、人類永遠の平和達成を念願

するアメリカ・シヤトル市のフロイド・シュモー博士及びこの趣旨に賛同する人々から寄贈された浄財を資金として市営住宅(シュモー住宅)を設ける。(市広報)」と説明している[70]。

シュモー住宅条例は、「シュモー住宅」を「長崎市橋口町55番地の1」に設置し、使用料の減免又は徴収猶予、準用、家賃や住宅の大きさを定めたもの。長崎積立金条例には、「シュモー住宅基金」の項目を加え、「シュモー住宅の建設費又は維持費の財源に充当」としている。

1951年　長崎の建設現場
提供：ジェームズ・ウィルソン

このように長崎市とシュモーとの間で行政手続きが完了し、シュモーが協力者に宛てた“TERMINAL REPORT 1950”によると[71]、まず5戸の住宅を建設している。シュモーはこの一帯を「Peace Village」と名付け、その一角に別枠でもう1棟を建てようとしていた。広島・長崎で、ほぼ同時に行われたコミュニティハウス（集会所）の建設である。大勢が集まれる部屋、図書室、教室、共同風呂、住人たちの世話や相談に乗ったりする管理人と、その家族のための住まいまで考えた計画だった。建設費用は広島と同じくアリス・ブライアントからの寄付によるものである[72]。

この事業を成し遂げるにあたって、地元の若者たちの協力が欠かせなかった。その一人がジェームズ・ウィルソンである。ウィルソンによると、「アメリカで社会学を学び、20歳の時に、日本の復興プログラムに応募した。当時、長崎に住んでいたが、偶然、広島で『ヒロシマの家』建設に参加したことがきっかけとなり、シュモーから長崎の現場を任されることになった。」という。ウィルソンは、一個人の償いとして家を建て平和を構築しようとしたシュモーに共鳴したのだ。ウィルソンと同い年で地元から参加した前田勇がその片腕となった（「ヒロシマの家」建設メンバーであるジェームズ・ウィルソンへの聞き取り調査より、2017年10月9日)。

その他、ウィルソンが講師を務めていたYMCAの英会話教室の生徒たちを中心とした社会奉仕グループのメンバーで、県立女子短大、活水短大、長崎経専（現在は長崎大学経済学部）の学生が参加した。この若者たちは、公園や外人墓地の清掃、乳児園への紙芝居慰問なども行う仲間であった[73]。1951年は、広島の建設現場からも数人の若者が交代で長崎に応援にいった（前掲の北川正博への聞き取り調査より)。アメリカ、東京、広島、長崎の若者たちは、仲間となって住宅に続いてコミュニティハウスをつくりあげた。

9．シュモー住宅への入居と暮らし

1951年10月、長崎市は、シュモー住宅5戸への入居者を募集した。入居の条件は、①長崎市で戦災を受け、市内に居住し特に住宅に困窮している方、②18歳未満の子供2人以上と同居して主として自己の収入で生活を維持している未亡人の方、③家賃月額680円を支出できる収入のある方、④生活困窮の方、として

1951 年　長崎　「Peace Village」
提供：ジェームズ・ウィルソン

シュモー住宅と山里小学校
提供：ジェームズ・ウィルソン

いる[74]。

ただ、前述の 1950 年 8 月 28 日に交わした「協定書」（史料 1）や 1951 年 7 月 2 日に公布された「シュモー住宅条例」の内容をより具体化させたものになっていた。どのような家族に入居してもらうのがよいか、長崎市がシュモーの意向をくみ取って最後の最後まで考え続けた結果なのであろう。

1951 年　長崎　シュモー住宅の住人たちとウィルソン（後列右から 2 人目）　提供：ジェームズ・ウィルソン

5 戸の家には年末までに、すべての家族が入居を終えた。「シュモー住宅」は父親のいない子どもたちにとって夢にまで見た「うちんがた（我が家）」となり、同年に建ったコミュニティハウスは皆が集い安心できる「居場所」となった（長崎「シュモー住宅」元住人である馬場允夫への聞き取り調査より、2018 年 3 月 12 日）。

1952 年 10 月 9 日、シュモーはひょっこり田川務・長崎市長を訪ねて「今年も 1 戸建てる」と伝えた[75]。「シュモー住宅」は、新しく寄せられた浄財や家賃の積み立て分、市の助成などによって、1952 年に 1 戸、1953 年にも 1 戸、1960 年には最後の 1 戸が建てられた[76]。

住人たちは、小さな公園を囲むように配置した住宅 8 戸とコミュニティハウスで、ペットを飼い、庭に花や野菜を植え、助け合いながら日常を送った（前掲の馬場允夫への聞き取り調査より）。

住宅建設をするうえで責任者を務めたウィルソンは、建物を作るだけでなく、約 2 年間にわたり住人の一人となって日常を共にした。母親たちが仕事に出かけている間、幼い子供たちの世話役をしていたのである。風呂焚きや食事の用意をする一方、川遊び、トランプ、畳一枚ほどの大きな凧を手作りしての凧揚げ、相撲やレスリング、クリスマス会も楽しんだ（前掲のジェームズ・ウィルソンへの聞き取り調査より）。

元住人で、就学したばかりだった馬場允夫は当時のことをよく覚えていた。「ジムさん（＝ジェームズ・ウィルソン）は、子どもたちにはお父さんでありお兄さんのような存在だった。お袋たちは、シュモーさんが来崎すると、一番いい服を引っ張り出してきて、出迎えた。その後、コミュニティハウスでお茶会が開かれたが、子どもはあっちに行って遊びなさいという感じで入れてもらえなかった。

コミュニティハウスの中で
提供：ジェームズ・ウィルソン

1952 年頃　コミュニティハウスの中で楽しいクリスマス会　提供：ジェームズ・ウィルソン

お袋たちは、日々感謝を忘れず、遠く離れていてもシュモーさんの存在を心の支えにしていたと思う。でも、子どもたちにとっては、側にいて遊んでくれるジムさんが、ヒーローでありあこがれの存在だった。ある日のこと、シュモー住宅の子どもたちは学校の教師からいわれのないことで差別を受けた。何か事件が起こるとまず自分たちが疑われていた。それを知ったジムさんは、すぐさま校長室に駆け込み、『自分が父親だ。不当な扱いはやめてくれ！』と抗議をした。また、理由なく近所の人から叱られたことがあり、それは今でも辛い思い出。でも、その時もジムさんが『私の子どもはそんなこと（悪いこと）はしない。』と庇ってくれた。嬉しかった。『私の子ども』と言われたことと、守ってくれるジムさんがいることで、少しずつ強くなれた。ジムさんと一緒の暮らしが、自慢にもなっていった。今思えば、被爆により同じ痛みをもつはずの人々に傷つけられ、その傷をアメリカ人のジムさんが癒してくれる存在になっていた。シュモー住宅は『我が家』となり、コミュニティハウスにはジムという『人』がいた。そして、同じ境遇の『友達』がいた。これを『居場所』というのだろう。楽しかった。有難かった」と目を細めた（長崎「シュモー住宅」元住人である馬場允夫への聞き取り調査より、2018 年 5 月 27 日）。

馬場の 7 歳離れた兄・昌宏によると、「シュモー住宅に当選したときのことをよく覚えている。まっさらな家に住める、家族全員で暮らせるというので全員で飛び上がって喜んだ。庭が広く家に入ると木の香りがした。みんな母子家庭ということもあり仲良くしていた。しかし、学校では、『アメ公の家に住んでいるのか！』と意地悪な同級生に言われ悔しい思いをした。被爆者にもいろいろあって、父親がいるといないで違うのか、よくいじめられたが、ジムさんがいつも助けてくれた。年は若かったが、お兄さんというよりお父さんという存在だった。当時は珍しいチュウイングガムやチョコレートをもらうことも楽しみの一つだった。いつも愛情をもって自分らを可愛がってくれた。シュモー住宅には 18 歳まで住み、いったん離れた。その後、結婚してまたシュモー住宅に戻って母親と祖母も一緒に暮らした。最初の子どもはここで生まれた。祖母が亡くなった時は、広い庭があったおかげで船の形の大きな精霊を作り、みんなで見送ることが出来た」と、シュモー住宅での暮らしを振り返った（長崎「シュモー住宅」元住人である馬場昌宏への聞き取り調査より、2018 年 3 月 15 日）。

シュモーが、関わった全ての人が友人であり隣人となり、憩いの場所になるようにと願った長崎の「Peace Village」へ込めた思いは名実ともに、その地に根付

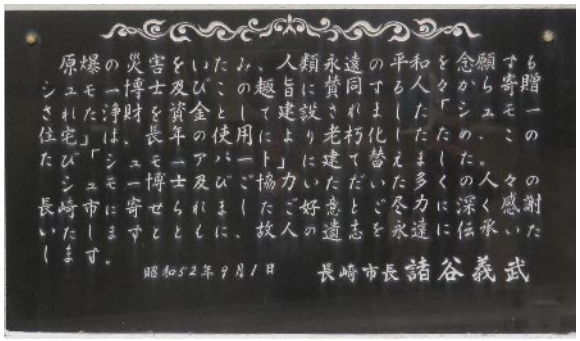
いていったのである。

10．長崎に建った「シュモー住宅」と住人たちのその後

1976 年 3 月 10 日、長崎市議会の定例会で「シュモー住宅条例を廃止する条例」の審議が行われた。具体的には老朽化したシュモー住宅を中高層アパートに建て替えようとすることへの審議であった。それに際し、岡正治・市議会議員[77]が登壇して市長へ質問をしている。その要旨は、シュモーの「ヒロシマの家」計画に賛同した多くの人々の厚意を忘れないためにどのような配慮を示し、住宅を建てるために奉仕をしてくれた人々に対していかに了解をとりつけ、これまで受けた恩恵にどのように謝意を表すのか、具体的に記念碑や顕彰碑など建設する予定はあるのかというものだった。それに対して諸谷義武・長崎市長と建築部長から、関係者には建て替えの趣旨を伝え了解を得ていること、感謝の意を伝える方法は目下検討中であること、新しいアパートに建て替わってもシュモーの意志を伝承していけるような管理方針を立てたいと考えていること、顕彰については厚情に感謝し功績をたたえる記念碑を建てることを考慮しているとの答弁がなされた。また、他の議員から、広島にも同様趣旨の住宅が存在するが、長崎市が独自で取り扱わず広島市の考えも知ることが必要だという発言があり、それを受けて建築部長からは広島市に問い合わせ中との答弁があった[78]。

1977 年、シュモー住宅は取り壊され、跡地には 6 階建ての「シュモーアパート」が建ったのである。建物の壁面には、シュモーたちの善意に対する感謝の銘を刻んだプレートが掛けられた。実は、そのプレートの設置を強く望んだのは元住人たちであったというのだ。かつての住人、馬場は「シュモー住宅が建て替えになると聞いて、ずっと住み続けたいと思っていたお袋たちは残念がった。しかし、家がなくなってもシュモーさんに感謝せにゃならんということで長崎市に頼んでプレートを作ってもらった」と話した。更に、幼かった頃を振り返っているうちにこう続けた。「思い出は全てここにある。原爆がなかったらジムさんとの出会いはなかった。でも原爆がなかったら父は生きていた」と（長崎「シュモー住宅」元住人である馬場允夫への聞き取り調査より、2018 年 3 月 12 日）。彼は母親の胎内で被爆した上に、父親をも原爆で失っていたのだ。

2019 年春、馬場は 65 年以上も音信不通だったウィルソンが埼玉にいることを知りその自宅を訪ねた。玄関先で、91 歳になったウィルソンに力いっぱい抱き



シュモーアパートの壁面に掲げられたプレート

2019 年 4 月　当時の写真を見ながら懐かしむジェームズ・ウィルソン（左）と馬場允夫（右）

締められ、「愛されていると感じた。カッコ良く、たくましい『父』はここにいる。俺の人生、いいね」と、頷いた（長崎「シュモー住宅」元住人である馬場允夫への聞き取り調査より、2019年4月3日）。

馬場は埼玉からの帰り道、また秋には訪問すると言った。理由は、高齢のウィルソンが安全に過ごせるように、今度は道具を持参して家の中を修理してあげたいというのだ。かつて、ウィルソンが責任者となって建てた家に住んだ馬場が、今度はウィルソンのために金槌を握ろうとしていた。しかし、それから半年後、ウィルソンは、91歳の生涯を終えた。

11．今回の広島・長崎の調査を通じて明らかになったこと

広島での活動について

今回のシュモーに学ぶ会の調査で、わたしたちはさまざまなことを学ぶことができたが、とくに新しい発見としては次の点を挙げることができる。

広島での調査で得た大きな発見の一つは、シュモー初訪日時の具体的な様子を知ることができたことである。1948年にシュモーが初めて日本を訪れた事実自体は、これまでから資料で把握できていたが、その際の具体的な様子はあまり分からなかった。今回の調査でシュモーに学ぶ会は、シュモーの活動に関する新しい写真を複数入手することができた。この写真にはシュモーの初訪日の時の写真が含まれており、さらに写真の裏の書き込みからも新しい情報が読み取れた。本稿で叙述したような、船上で山羊の世話をしながら訪日する様子等は、写真の入手とそれに付随する聞き取りによって明らかになったものである。シュモーの足跡を知るうえで、これは新たな知見である。

また、この他にも、今回の調査で入手した写真にはさまざまな人の活動が撮影されていた。その中にはシュモーが来日しなかった1951年の写真もいくつか含まれていた。1951年は江波二本松の「ヒロシマの家」が建設されていた年であるが、シュモー不在であっても、仲間たちがシュモーの掲げた理念を体現し、生き生きと活動していた様子があらためて確認された。

長崎での活動について

一方、長崎の調査で明らかになった内容で、特記しておく点は、長崎の「シュモー住宅」の戸数を明確にできたことである。

長崎に「シュモー住宅」が建てられた経緯や建設件数、戸数については、これまでの研究や関係文献で相違がみられた。例えば、完成した住宅の総数について、『長崎市史年表』には8戸、『長崎市議会史　記述編　第三巻』には16戸と記されているが、具体的な経緯等は記されていない[79]。

本稿で記したとおり、今回のシュモーの会の調査では、元住人たちの証言や新たに発見された写真等を整理し、その結果、「シュモー住宅」は1951年から1960年までに8戸が建設されたと判断した。この数字は『長崎市史年表』と同じであり、同書の記述を具体性を持って裏付けることになった。

また、コミュニティーハウスは1951年に完成したことも分かった。ただしコミュニティーハウスは住宅ではないという理由から「シュモー住宅」とは別扱い

とされ、そのため「シュモー住宅」の戸数には計上されていないことも明らかになった。

また、シュモーと長崎市の間で交わした「協定書」は他の関係文献と合わせて長崎にシュモー住宅が建てられた経緯だけでなく家に込めたシュモーの想いが見て取れた。特に、「協定書」を定め、「入居の条件」を規定するまでに、シュモーがどのような家族に住んで欲しいかということを明確に長崎市に示している。すなわち、戦争や被爆により苦境に立たされた人、本当に困っている人々に寄り添い最後の最後まで思いを馳せた結果が「協定書」の中に追加された「宗教・民族や社会的地位は入居の条件にしない」という一文に現れている。そこには不公平・非人道的であることは許されず、少数者への視点を持つというシュモーの信念ともとれるこだわりがはっきり見て取れたのは大きい。

それだけでなく、長崎においてシュモーが直接ハンマーや鋸を手に家づくりをしてはいないが、その地に赴いて住人たちと触れ合い、交流をしていたことも関係者からの聞き取り調査を通じてわかった。シュモーは、「市民と同じ生活を送り寄り添うように」と言っていたという。その言葉を裏付けるかのような証言をたくさん聞かせてもらった。電車や自転車で現場に通い、家は日本建築にこだわり、スイカの差し入れがあると車座になってみんなで分け合って食べたことなど、どれも日常を語ったものだ。「ヒロシマの家」が特別のプロジェクトであったとしても、関わったすべての人にとって日常の延長でありこれこそが平和の営みであること。数字や記録だけでなく、生身の人間が経験した痛みや苦しみ、癒しや喜びという記憶が貴重な証言となり「ヒロシマの家」の持つ意味を改めて知ることになった。

12．まとめにかえて

シュモーは、一世紀を超えて世界中を訪れ苦境に立たされている人々に寄り添い、柔らかな微笑とともに温かい手を差し伸べた。また、生涯揺らぐことのない信念を持ち続け、世界平和の実現に向けて言葉より行動を優先させた。晩年のシュモーと生活をともにした富子は、「フロイド（シュモー）の一番大切なものは何と言っても世界平和。信念に従ってやるべきことをしていた。でも自説を曲げることなく、非常に頑固だった。もっとも、それほどの信念を持たなければHouses for Hiroshimaの仕事も出来なかったでしょう」と、言う。

シュモーがたった一人から始めた「ヒロシマの家」計画は、自国の起こした罪を償いたいとの思いからだった。仲間と共に作り上げた家は、大河の一滴かもしれないが、そこには人間の良心と行動の証があった。元通りにすることは出来ないが、人のもつ優しさが互いに癒しとなり希望となった。シュモーと仲間たちが実践した精神は、「シュモーハウス」に受け継がれ、人々の記憶の中に生き続けるであろう。「平和は言うことではない行うことだ」の言葉とともに。

（注）

・本稿に掲載した写真は特に断りのない限り「シュモーに学ぶ会」所蔵の写真である。

・本稿の原稿の体裁はこの研究報告の編集・発行者である広島平和記念資料館資料調査研究会事務局の協力を得て整えた。

【史料紹介】

＊以下はいずれも長崎市への情報公開請求により開示された行政文書（昭和 25 年 7 月 28 日付起案「市営住宅建設に関し協定書調印について」）に綴られた文書。なお、決裁日は同日付となっており、その起案文書である以下の史料 1 から順に史料 2 の協定書、史料 3 の協定書の素案とみられる付属文書が綴られている。判読できなかった文字については以下では「■」をあてた。なお、史料判読に関しては長崎市住宅課の方にお力添えいただいた。

史料 1（起案文書）

「市営住宅建設に関し協定書調印について」

本月二十八日米國ワシントン州シヤトール（ママ）市居住のフロイドシュモー博士より市営住宅建設費として別紙協定書案の条件により長崎市に対し資金贈與の申越しがあったが本件は本市民の住宅難緩和の一助として誠に感謝すべき且つ有利な条件と思慮されますので別紙により協定書に調印してよろしきや

史料 2（別紙の協定書）

「長崎市役所と米國ワシトン（ママ）州シヤートル市北東五五、一三、四三四番地四〇居住のフロイドシュモーとの間の協定書」

長崎市役所は下記條件に従ひ、一軒或ひはそれ以上の住宅を建てるようにすることが、本協定書により協定された。

右住宅は長崎市が所有する土地に建てられること。基礎はコンクリト　屋根はセメント瓦の木造漆喰塗の住宅であること。居間の床は疊敷とすること。水道並びに電氣の設備をすること。適当な便所があること。建坪は約一一 . 七坪とすること。建築資金が使へるようになつてから三月以内に建築のこと。

右住宅は長崎市の所有とし、毎月の家賃は市営住宅の同型のもの、九〇％を超えざること。困窮している家族に賃貸されること。家賃は家屋の維持費並びに増加に使用さるべき特別基金へ繰り入れられること。此等の住宅は困窮せる家族へ貸され、■■■■■■大戦中火災或るひ（ママ）は爆撃のために家を失った子供のある家族に賃貸されることが望ましい。宗教、人種又は社会的地位は受入れの條件とならない。更にフロイドシモーは一軒或ひはそれ以上の■■■■■■、一軒一三五、〇〇〇円の割合で資金を供給すること。右資金はこの目的のために、上記諸條件の外何等の留保なしに、長崎市へ贈與するものとする。且つ此の協定は、必要の場合関係当事者間の合意によつて変更できること。

右の通り協定する。

長崎市代表　　助役　伊藤久秋　印

フロイドシュモー

日附　　一九五〇年七月二十八日

証人　長崎市建設局長　成瀬　薫

史料 3（協定書の素案とみられる付属文書）

「長崎市役所とワシントン州シヤートル市五五エヌ、イー、四〇一三、四三四番地フロイドシモー、との間の協定」

長崎市役所は下記明細書に従ひ、一軒或ひはそれ以上の住宅を建てるようにすることが、ここに協定されました。
此等の住宅は長崎市が所有する土地に建てられます。彼等はコンクリート基礎とセメント瓦屋根の木造漆喰塗の住宅であります。居間の床は疊敷にされます。水道並びに電氣の設備があります。適當な便所も設備されます。此等の住宅の面積に約一一、七坪であります。
此等の住宅はその建築資金が使へるようになつてから三月内に建てられます。
比等の住宅は長崎市の所有となり、一ヶ月の家賃は市営住宅の同型のものの九〇%以内として、困窮している家族に貸されます。家賃は維持費並びに増築家屋に使用さるべき特別基金へ繰入れられるべきです。猶此等の住宅は困窮せる家族へ貸され、且つ優先的に今度の戦争で火災、或ひは爆撃のために家を失った、子供のある家族に貸されることが協定されました。
更にフロイドシモーは一軒或ひはそれ以上のこんな住宅に対して、一軒一三五、〇〇〇圓の割合で資金を供給すること、並びに彼はこの目的のために、上記諸條件の外何等の留保なしに長崎市へその資金を贈與することが協定されました。
且つ此の協定は、必要ならば関係當事者間の合意によつて変更できることが協定されました。

長崎市代表
フロイドシモー
日附
証人

【これまでに本会が実施した聞き取り調査一覧】

・北川正博（「ヒロシマの家」建設メンバー）、横浜市内の北川氏の自宅にて聞き取り、2017 年 10 月 9 日。
・ジェームズ・ウィルソン（「ヒロシマの家」建設メンバー）、所沢市内のウィルソン氏の自宅にて聞き取り、2017 年 10 月 9 日。
・シュモー・富子（「ヒロシマの家」建設メンバー、妻ルースを病気で亡くしたシュモーと 1970 年に再婚）、シアトル市内の富子氏のアパートにて聞き取り、2019 年 9 月 30 日及び同年 10 月 1 日。
・津田豊彦（「ヒロシマの家」建設メンバー）、広島市内のホテルにて聞き取り、2009 年 4 月 12 日。
・デブラ・ドーソン（「ヒロシマの家」建設メンバーであるデイジー・ティブズの長女）、広島市内の「縮景園」にて聞き取り、2015 年 4 月 10 日。
・布川謙（「ヒロシマの家」建設メンバー）、北杜市内の布川氏の自宅にて聞き取り、2019 年 11 月 12 日。

・馬場昌宏（長崎「シュモー住宅」元住人）への電話での聞き取り、2018 年 3 月 15 日。
・馬場允夫(長崎「シュモー住宅」元住人)、長崎市内の馬場氏の自宅にて聞き取り、2018 年 3 月 12 日及び 2018 年 5 月 27 日。
・同上、東京都豊島区内のホテルにて聞き取り、2019 年 4 月 3 日。
・三宅幹夫（「ヒロシマの家」建設メンバー)、広島市内の観音教会にて聞き取り、2009 年 10 月 4 日。
・渡辺寛(「ヒロシマの家」建設メンバー)への電話での聞き取り、2009 年 8 月 24 日。

謝辞

本研究を進める過程において、関係者に直接お会いして、話を聞き交流を重ねることを大切にしてきた。しかし、コロナ禍により現地に赴くことや人に会うことが制限され、思うような調査を行うことが困難であった。そんな中、さまざまな形でご支援・ご協力を賜り心からお礼申し上げたい。

文末脚注

1 「広島の家」と終戦から 1953 年頃までのフロイド・シュモーの活動については、以下の長谷川寿美氏の研究を参照。長谷川寿美「フロイド・シュモーと「広島の家」」「人の移動とアメリカ」研究プロジェクト編『エスニック・アメリカを問う「多からなる一つ」への多角的アプローチ』彩流社、2015 年。

2 フロイド・シュモーについては彼自身の手記である *Japan Journey*（Seattle: Silver Quoin Press, 1950）があり、『日本印象記－ヒロシマの家』（フロイド・シュモー著、大原三八雄訳、広島ピースセンター、1952 年）として訳出されている。その他に、シュモーに関する主な参考文献として、Kit Oldham, 2010 “Schmoe, Floyd W.（1895-2001),” History Link.org Essay 3876.〈http://www.historylink.org/File/3876〉（2022/1/16 閲覧）を参照。

3 かつてシュモーが建設した「広島の家」を被爆後の海外支援を伝える建物として保存を求める声を受け、広島市は建物の保存修復を行い 2012 年に広島平和記念資料館の附属展示施設「シュモーハウス」としてオープンさせた。以下の同館のサイトに掲載されているこの施設のリーフレットを参照。〈https://hpmmuseum.jp/modules/xelfinder/index.php/view/2041/schleaf202010.pdf〉

4 「シュモーに学ぶ会」のこれまでの研究成果として『平和の足跡－シュモーさんの「ヒロシマの家」』（シュモーさんの「ヒロシマの家」を語りつぐ会編、2007 年)、『ヒロシマの家－フロイド・シュモーと仲間たち』（シュモーに学ぶ会編、2014 年）があり、他に紙芝居『シュモーさんとヒロシマの家』（シュモーさんの「ヒロシマの家」を語りつぐ会制作、山先方江 絵、2013 年)、絵本『シュモーおじさん』（シュモーに学ぶ会発行、戸川幸一郎 / 文・絵、2016 年）がある。

5 近年の研究成果として広島平和記念資料館学芸員の落葉氏による以下の研究がある。落葉裕信「「広島の家」－国や人種を超えて寄せられた支援」国際平和拠点ひろしま構想推進連帯事業実行委員会編『広島の復興経験を生かすために－廃墟からの再生－第 4 巻』（ひろしま復興・平和構築研究事業報告書)、2018 年。

[6] 本節のシュモーの経歴の説明は前掲の Kit Oldham, 2010 を参照。
[7] 大原三八雄「フロイド・シュモー博士の横顔　Dr. Floyd Wilfred Schmoe －序文にかえて－」（前掲『日本印象記－ヒロシマの家－』）7 頁。
[8] The Sea Going Cowboys の研究家 Peggy Reiff Miller 氏のウェブサイトを参照。〈https://seagoingcowboysblog.wordpress.com/2018/08/10/seagoing-cowboy-floyd-schmoe-remembered-in-japanese-documentary/〉(2022/1/16 閲覧)。なお、Miller 氏は山羊の数を「227 頭」としているが、シュモー自身が「250 頭」と記した資料もあり（孫のジュデイ・ルドルフ氏所蔵の写真)、連れてきた頭数にはやや幅がある。
[9] 今堀誠二『原水爆時代』（上)、三一書房、1959 年、214 頁。
[10] 広島市『市勢要覧（復興第一年号）昭和二十一年版』1947 年、57-58 頁。
[11] 被爆 50 周年記念史編修委員会編『被爆 50 周年図説戦後広島市史－街と暮らしの 50 年』広島市企画総務局公文書館、69-70 頁。
[12] このワークキャンプの様子についてはフレンズ・センター発行の機関紙『東京フレンズ』掲載記事である「育児会における Work Camp」(『東京フレンド』№ 6、フレンズ・センター、1948 年 10 月 1 日）を参照。
[13] 大津光男「広島と長崎での奉仕　フロイド・シュモーのこと」『友』No.309、キリスト友会日本年会発行、2019 年 1 月。
[14] 厚生省『ララ記念誌』1952 年、38-39 頁。
[15] 「育児会における Work Camp」前掲『東京フレンド』№ 6、1948 年 10 月 1 日。
[16] Letter from Floyd Schmoe to Ruth Jenkins, January 9, 1949, Emery E. Andrews papers, 1925-1959, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.1908_001, Box1, Folder15.
[17] 『朝日新聞』2017 年 1 月 8 日。
[18] 前川博宛フロイド・シュモーの書簡、1949 年 4 月 17 日、前川博寄贈、シュモーに学ぶ会所蔵。
[19] Letter from Floyd Schmoe to Miss Thompson, September 14, 1949, Floyd W. Schmoe papers, 1903_1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496_008, Box12, Folder16.
[20] 前掲 Kit Oldham, 2010 “Schmoe, Floyd W. (1895-2001),” History Link.org Essay 3876.〈http://www.historylink.org/File/3876〉(2022/1/16 閲覧)。
[21] 「フロイド・シュモー氏等　広島に愛の勤労奉仕　2 か月の労苦みのる」『友』No.3、キリスト友会日本年会発行、1950 年 4 月。
[22] Emery Andrews（エメリー・アンドリュース）“Hiroshima Diary” Brooks Andrews（ブルックス・アンドリュース）寄贈、広島平和記念資料館所蔵。
[23] 前掲『日本印象記』39-40 頁。
[24] 前掲大津光男「広島と長崎での奉仕　フロイド・シュモーのこと」。
[25] 前掲 Emery Andrews “Hiroshima Diary”
[26] 前掲『日本印象記』8-9 頁。なお、同書 8 頁では高良とみを「広島県出身の参議院議員」である「高良富子女史」と紹介しているが、正しくは富山県出身であり「高良富子」はペンネームであり国会議員としては「高良とみ」として活動していた。

[27] 同上、12 頁。
[28] 『朝日新聞』1949 年 8 月 5 日。
[29] 前掲『日本印象記』16 頁。
[30] 同上、29-30 頁。
[31] 前掲 Emery Andrews “Hiroshima Diary”。
[32] 濱井信三「シュモー博士と広島の家」前掲『日本印象記』所収、72 頁。
[33] 前掲『日本印象記』39-40 頁。
[34] 同上、39 頁。
[35] 同上、43 頁。
[36] 『毎日新聞』1949 年 9 月 29 日
[37] 同上、51-52 頁。
[38] 同上、52-53 頁。
[39] 同上、29-30 頁。
[40] Floyd Schmoe “TERMINAL REPORT 1950” 前川博寄贈、シュモーに学ぶ会所蔵。
[41] 『毎日新聞』1950 年 6 月 13 日。
[42] 同上。
[43] 諫早信夫「シュモー博士の『愛の家』」『住宅雑誌「新住宅」』9-10 月号、新住宅社、1950 年 10 月 15 日、48-49 頁。
[44] 前掲 Floyd Schmoe “TERMINAL REPORT 1950”。
[45] 前掲『原水爆時代』（上）、221 頁。
[46] 同上、224 頁。
[47] この節はいずれも『中国新聞夕刊ひろしま』1951 年 8 月 9 日。
[48] 松山善三『人間三代：佐竹製作所百年史』佐竹製作所、1997 年、141-147 頁。
[49] Floyd Schmoe, “TERMINAL REPORT 1951 SEASON,” Floyd W. Schmoe papers, 1903_1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496_008, Box12, Folder16.
[50] 前掲『原水爆時代』（上）、225-226 頁。
[51] ルース・ウィリアムズ、2008 年 12 月 9 日投稿、History.Link.org エッセイ 8865〈https://www.historylink.org/File/8865〉（2022/1/16 閲覧）。
[52] 広島市編『広島新史　歴史編』1984 年、567-568 頁。
[53] Floyd Schmoe, “PROGRESS REPORT NOVEMBER 1952,” Floyd W. Schmoe papers, 1903_1993, The University of Washington Libraries, Special Collections, Accession No.0496_008, Box12, Folder16.
[54] 『中国新聞』1953 年 8 月 14 日。
[55] 長崎市役所『市制百年長崎年表』1989 年 4 月、202 頁。
[56] 前掲 Floyd Schmoe, “TERMINAL REPORT 1951 SEASON”。
[57] 前掲 Kit Oldham, “Schmoe, Floyd W.（1895-2001）”。
[58] 『中国新聞』1992 年 5 月 5 日。
[59] 『中国新聞』1990 年 4 月 20 日夕刊。
[60] 同上。
[61] 『読売新聞』2018 年 11 月 24 日。

[62] 前川博宛フロイド・シュモーの書簡、1949 年 1 月 29 日、前川博寄贈、シュモーに学ぶ会所蔵。
[63] 近藤紘子『ヒロシマ、「60 年の記憶」より』二見書房、2005 年、92-93 頁。
[64] 『中国新聞』1949 年 9 月 15 日。
[65] 前掲『被爆 50 周年図説戦後広島市史』69-70 頁。
[66] 『中国新聞』1983 年 11 月 25 日。
[67] 長崎市への情報公開請求に基づき開示された長崎市とシュモーとの間の協定に関する資料。なお、本会がこの資料を入手するにあたり毎日新聞社長崎支局の今野記者に協力いただいた。
[68] 『長崎日日新聞』1950 年 8 月 16 日。
[69] 長崎市議会編『長崎市議会史　記述編　第三巻』1997 年、752-753 頁。
[70] 長崎市『長崎市史年表』1981 年、219 頁
[71] 前掲 Floyd Schmoe, “TERMINAL REPORT 1950”。
[72] 前掲 Floyd Schmoe, “TERMINAL REPORT 1951 SEASON”。
[73] 広田助利「被爆母子家庭の戦後を支えた/シュモーさんと若者たちの愛の住宅」『ながさき郷土文芸誌　ら・めえる』第 4 号、長崎ペンクラブ、1983 年、41 頁。
[74] 市長室「シュモー住宅入居者申込受付について（長崎市役所欄 34 号）」『長崎日日新聞』、1951 年 10 月 10 日。
[75] 『長崎日日新聞』1952 年 10 月 10 日。
[76] 長崎市『市制百年長崎年表』1989 年、202 頁。
[77] 1995 年に設立された「岡まさはる記念長崎平和資料館」の名称は岡正治に由来するもの）〈https://www.okakinen.jp/〉（2022/1/16 閲覧）。
[78] 長崎市『昭和五十一年第三回長崎市議会会議録　定例会』1976 年、157～159 頁。
[79] 前掲『長崎市史年表』（1981 年発行）は「シュモー住宅」の数について、「木造住宅 8 戸（昭和 26.10 に 5 戸、同 27.3 に一戸、同 28 年 3 に一戸、同 35.3 に 1 戸）」と記述している（219 頁）。一方、前掲『長崎市議会史　記述編　第三巻』（1997 年発行）は、「7 月には木造住宅 8 戸が、10 月には 5 戸が建設された。（中略）翌 27 年 3 月に 1 戸、28 年 3 月にも 1 戸、35 年 3 月にも 1 戸の合計 16 戸が建設された」と記述している（753 頁）。両者の違いは 7 月建設とされる 8 戸であるが、表現を比較すると、『長崎市議会史　記述編　第三巻』は『長崎市史年表』の数字を二重に計上したのではないだろうか。なお、前掲 Kit Oldham, 2010 “Schmoe, Floyd W.（1895-2001）”,（History Link.org Essay 3876.）では「12 戸」と記載されているが、根拠は不明である。

また、建設中の様子については、1951 年 2 月 15 日付の『長崎市政展望』（長崎市役所秘書課発行）が「5 月までに 5 戸のしようしゃな住宅が建設されることとになつた」と述べ、同年 5 月 24 日付『長崎日日新聞』も「現在 5 戸建設中」と報じたが、住宅の完成を伝える報道はこれまでのところ見つけられていない。ただし、1951 年 10 月 10 日付『長崎日日新聞』に「シュモー住宅」の入居者申込受付についてが掲載されている（注 74 参照）。